

教育ボランティア活動と大学生の教師力向上との結び付きに関する一考察

—横浜国立大学の学生の活動における「ものづくり事例」と学生調査—

教育デザインコース 技術領域

鬼藤 明仁

1. はじめに

大学は高等教育機関であり、大学生は後期中等教育（高等学校等）での学習成果を基に、さらに高度な理論を学び、視野を広げて創造性を高めるとともに、それらを実践する行動力を身に付けることになる。近年、大学生が大学構外で社会的・職業的活動を行うことが、単なる職業観・勤労観の育成にとどまらず、大学の学修のためのプロセスとして重要視されている。その代表的な例としてボランティア活動が挙げられる。ボランティア活動は、地域団体、NPO法人、地方公共団体等によって、教育、福祉、自然環境保全、地域振興、被災者支援等の多岐の分野に渡って実施されている。

教育ボランティア活動には、アシスタントティーチャー（略称はAT）、放課後学習支援、部活動支援、校外学習の補助等がある。また、地域の子どもの交流活動（レクリエーション、農業体験、まつり参加等）、野外活動（キャンプ等）など、ボランティア活動をする者自身が企画・運営するケースもある。なお、学童保育の指導員など福祉の業務も、一般的には教育ボランティア活動に含まれると思われる。

知識基盤社会化、グローバル化、少子高齢化等の社会変動が問題とされて久しい。それらに対応するべく、学校教育のさらなる充実、引いては教師力の向上が求められている。中央教育審議会（2015）¹⁾の答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）（中教審第184号）」では、教員の養成・採用・研修の一体的改革の必要性が提言されている。

学校教員養成機関として大学の教員養成課程（教育学部等）は、「教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修」を行う段階であり、実践的指導力の基礎を育成している（中央教育審議会、2015）¹⁾。学校現場や教職を学生が体験する機会を充実させることが求められるが、そのために教育ボランティア活動を採り入れる事例

が見られる。

これまで教育ボランティア活動は自主的な奉仕活動の面が強調され、子どもの成長に携わることによって充実感が得られる点に着目されることが多かったように思われる。また、教員業務の職場体験として、職業観・勤労観が育まれ、社会性を身に付けられる点も特徴に挙げられることも多いだろう。一方、上述した通り今後は、大学の教員養成課程と結び付け、「教員となる際に必要な最低限の基礎的・基盤的な学修」を行う場面として、教育ボランティア活動を大学カリキュラムにおいて積極的に活用し、学生の教師力の向上を目指すことが必要になると考えられる。

既存の研究においても、教育ボランティア活動と、教員養成課程に所属する学生の教師力向上との関係性を検討したものがあつた。進藤ら（2009）²⁾は、「授業での指導補助」「放課後学生チューター」「中学生対象の自学講座」「子供図書室運営」等について活動した学生を対象に質問紙調査を実施し、調査データを分析している。また、若尾・緩利（2014）³⁾は、夏休みに「近隣小学校の合宿のサポート」「不登校児童を対象とした川下りイベントのサポート」「付属幼稚園における預かり保育のサポート」等を行った学生を対象に質問紙調査を実施し、ボランティアへの参加前後における意識や態度の変化について考察している。これらの研究は、上記の教育ボランティア活動に参加した学生が、子どもの実態把握など教師力を伸長させていることを示唆している。

しかしながら、上記の既存の研究では、学校業務を補助する役割を学生が担う事例が多く、学生自身が企画・運営する役割を担うボランティア活動の事例はほとんど取り上げられていない。企画・運営する側を学生段階で経験することは将来の教師としての視野が広がると考えられる。このようなタイプのボランティア活動の活用についても今後は教員養成課程で重要になるといえることから、そこで学生が具体的にどのような能力を形成して

いるのか明らかにすることは、大学の教員養成に関わる学生・教職員にとって有用な知見になると考えられる。

本研究の目的は、教員養成課程に所属する学生とりわけ、企画・運営する主体者としてボランティア活動に取り組む学生を対象に、教師力向上について検討することとする。ここでは、一事例として横浜国立大学の学生の「地域の子どもの交流活動」を取り上げるとともに、その活動の一つとして「ものづくり」を紹介する。また、質問紙調査を実施し、その集計結果を基に、教育ボランティア活動と大学生の教師力向上との結び付きについて考察する。

2. 横浜国立大学における学生が企画・運営する教育ボランティア活動及びそこでの「ものづくり事例」

横浜国立大学において教育ボランティア活動に携わる学生団体はいくつか見受けられるが、そのうち「地域の子どもの交流活動」を目的とし、学生たちが中心となって活動の企画・運営を行うものとして「わくわくサタデー」、「がやっこ探検隊」の2つを挙げることができる。ここでは両団体の活動を紹介するとともに、具体的な活動内容として「ものづくり事例」を提示し、どの程度の規模の企画・運営なのか示しておく。これらは、次節の調査データの考察においても基礎資料となる。

2.1. 学生団体「わくわくサタデー」の活動紹介

「わくわくサタデー」では、土曜日に小学校でレクリエーション大会を行っている。1年では大学の春学期に2回、秋学期に2回の計4回開催する。各回の内容は小学校1校を会場とし、学級教室、特別教室（理科室等）、体育館や廊下など様々な場所で、約3時間にわたり種々のレクリエーションを行うものである。

2017年時点で、この団体には20年程度の歴史があり、毎年80名ほどの学生が所属している。2年生が執行部を形成し、委員長、副委員長（共に1年任期）を務めている。他に、会場校との連絡窓口となり使用教室の打ち合わせや児童が希望するレクリエーションコースのアンケート依頼を行う渉外係長、レクリエーション中の児童の健康・安全についてマニュアルを策定してメンバー学生に指導する保健係長、レクリエーションで使用する道具・衣装の材料購入費等を管理する会計係長、開会式・閉会式のプログラムを作成して司会進行・全体プロロー

グ劇・全体エピローグ劇を取り仕切る開閉会式係長などがある（委員長・副委員長以外は秋学期では1年生が務めることがある）。

1回分の内容は、受付（体育館）、全体開会式（体育館）、各コースのレクリエーションの実施（教室など様々な場所）、全体閉会式（体育館）で構成される。受付では児童の出席確認を行い、参加コース別に装飾された名札を付けてもらう。全体開会式では学校長の挨拶、司会による注意事項の説明、全体プロローグ劇がある。劇の内容は、主人公（「もっくん」というキャラクター）がトラブルに巻き込まれるが、解決するために頑張る気持ち（「わくわくパワー」と呼称）を高めてくるように参加児童に呼び掛けるものである。回ごとに開閉会係が流行の事柄を取り入れて脚本を制作している。レクリエーションは数種類のコースが用意され、それぞれは日本の伝統遊び、ダンス、外国の遊び、運動、ものづくり、謎解きといったテーマを軸にストーリー仕立てで進行する。事前に希望コースはアンケートで決定されており、参加児童はコースごとに分かれ、それらの会場となる学級教室や特別教室に移動する。全体閉会式では、参加児童全員が体育館に戻り、全体エピローグ劇、副校長の講評が行われる。この開催当日に限り、他大学で教育ボランティア活動に取り組む学生（毎回10名程度）を受け入れ、協力して活動する点も「わくわくサタデー」の特色となっている。

レクリエーション事例として、2016年度秋学期開催時のものを表1に示す。レクリエーションは、例えば秋学期の2回分では共通して使用される（春学期2回分も同様）。なお、「わくわくサタデー」では、レクリエーションを「講座」と呼称しているため、表1の表記もそれに倣うことにする。

2.2. 学生団体「がやっこ探検隊」の活動紹介

「がやっこ探検隊」は、首都圏内Y市H区地域の小学生を対象として、休日に子どもたちと大学生との交流活動を行う。Y市H区役所と横浜国立大学教育学部との連携事業としてサポートも受けている。1年で7回実施されるが、春先に80名を募集し、その80名が全7回に参加するため、回を重ねて交流が深まる点に特徴がある。

2017年時点で13年の歴史があり、40名ほどの学生が所属している。3年生から総括担当者を1名選出し、各回ごとの企画長や、子ども5人ずつを班としてまとめるグループリーダーら（8名）と組織を形成している。

表1「わくわくサタデー」のレクリエーションの事例
(2016年12月3日開催分)

講座名	講座内容	テーマ
1班 ねーねーとりさん、たこあげしよう～おさるの年越し大作戦～	一人ずつ凧を作り、運動場で凧揚げを行うとともに、巨大凧揚げに挑む	日本の伝統遊び
2班 原始人ウォーズ	原始時代にタイムスリップし、原始人とダンスなどで仲良くなり、協力して問題を解決する。	ダンス
3班 わくわく冒険トラベル サンタと一緒にイッテQ	タイ、ケニア、イタリアの3カ国を回り、外国の遊びを行う。	外国の遊び
4班 季節を巡るわくわく旅～サンタにステキな恩返し～	春夏秋冬の各遊びを行い、冬のサンタに春夏秋冬の装飾をしたクリスマスツリーを贈る。	運動
5班 わくわくオバケのでづくりクリスマス	クリスマスオーナメントを製作し、オバケの街で鑑賞会を行う。	ものづくり
6班 探偵学園W～犯人の名は。～	探偵学園に入学し、そこで起こる事件の解決のため、謎解きを行う。	謎解き

他に保健や製作、会計を担当する学生がいる。

全7回の活動は、レクリエーション大会、キャンプ、区民祭りへの出店、農業体験、おかし作りなどである。1回分の活動は午前中から夕方まで、子ども40名を対象に様々な遊びを含むプログラムが組まれている(キャンプの回は1泊して2日目の夕方まで)。例えば、区民祭りへの出店の回では、午前8時30分に集合し、小学校体育館で開会式、班ごとに万華鏡の製作、区民祭りの会場(公園)まで移動して万華鏡工房の出店、体育館に戻りレクリエーション(手形を押す)、閉会式といった内容となっている。

上記2つの学生団体(わくわくサタデー、がやっこ探検隊)の相違を表2に示す。「地域の子どもの交流活動」を目的とする点は共通であるが、活動の対象が異なっており、それに伴って年間の活動回数、活動の内容、活動の場所も異なる。

2.3. 学生の教育ボランティア活動における「ものづくり事例」

上記の学生団体の具体的な活動内容として、「わくわくサタデー」の2016年12月3日開催分より、小学生を対象とした「ものづくり事例」を提示する。「わくわくオバケのでづくりクリスマス」と題されており、製作前に導入劇が行われ、クリスマスオーナメントを作ることになった経緯が説明される。導入劇は、「クリスマスの飾りつけを作ろうと集まった子どもたちがオバケと出会

表2 横浜国立大学において「地域の子どもの交流活動」を目的とする2つの学生団体の相違

	わくわくサタデー	がやっこ探検隊
活動の対象	Y市立小学校に依頼(※H区内に限らない)。開催小学校ごとに参加希望の児童を募集。	Y市H区役所Webページで広報。H区内在住の小学生が応募。
年間の活動回数	4回(4校)	7回
活動の内容	レクリエーション(日本の伝統遊び、ダンス、外国の遊び、運動、ものづくり、謎解き)	レクリエーション(運動、ものづくり等)、キャンプ、区民祭りへの出店、農業体験、おかし作り
活動の場所	Y市立小学校(4校、※H区内に限らない)	横浜国立大学教育文化ホール(レクリエーション)、Y市子ども自然公園青少年野外活動センター(キャンプ)、Y市H区公園(区民祭り)、Y市H区内農園、Y市H区内小学校

う。オバケの世界ではクリスマスの飾りつけが全くないと知り、オバケと協力してクリスマスオーナメントを製作し、オバケの街をキラキラに飾り付けることを目指す」との内容である。この世界観の下、子どもたちは製作に取り組むことになる。なお、オバケは学生が演じている。

2.3.1. 製作品「クリスマスオーナメント」

12月の時季に家で使用されるものとしてクリスマスオーナメントを着想し、小学校低学年児童が対象にいたため技量が高くなくても1時間程度で完成できるように構造・材料・工程を考えた。製作品の外観を写真1に示す。



写真1 クリスマスオーナメントの外観(ライトアップ時)

このオーナメントはクリスマスツリーの形状をしており、幹部分とカサ部分とで構成されている。幹部分は材料をプラスチックコップとし、カサ部分は半紙をラミネートフィルム加工したものを材料としている。コップの底は事前準備の際に穴を開けておき、完成後に小型ライトを入れてライトアップして使用する。

2.3.2. 工程及び使用する道具

工程表を表3に示す。まず、①プラスチックコップの選択では、作業上の注意事項が説明された後、子どもたちは自分の好みの色のコップを選ぶ。事前準備においてコップは学生によってある程度ペンで色が付けられている。子どもたちはカラーペンでさらに彩色する。②プラスチックコップの接合では、コップ2個をマスキングテープ（柄入り）で接合する（写真2参照）。マスキングテープの柄により装飾にもなる。③カサ部品の切り取りでは、ハサミでカサの形状に切り取り、セロテープで組み立てる。ここでもカラーペンを使用し、スパンコールやカラーセロハンを加えて装飾する（写真3参照）。④カサの組立では、セロハンテープでカサ部品を接合し完成させる。

表3 クリスマスオーナメントの工程表

工程	内容	使用する道具	時間
①プラスチックコップの選択	好きな色のコップを選ぶ	カラーペン	20分
②プラスチックコップの接合	コップ2つをマスキングテープで接合する	マスキングテープ	10分
③カサ部品の切り取り	ハサミでカサの形状に切り取る	ハサミ	30分
④カサの組立	セロハンテープでカサ部品を接合する	セロハンテープ	15分



写真2 プラスチックコップの接合作業の様子及び学生が使用した説明用イラスト（右）

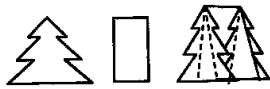
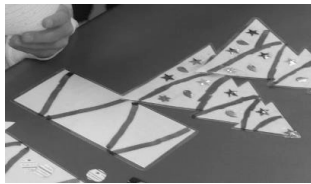


写真3 カサ部品の切り取り作業の様子及び学生が使用した説明用イラスト（右）

2.3.3. 鑑賞会

鑑賞会は作業の教室とは別の教室に移動して行われた。鑑賞会の教室は、事前準備の際に暗幕で窓を塞ぎ、オバケの街として飾りつけされている。鑑賞会では、子どもたちが製作したクリスマスオーナメントの点灯式を行い、オバケから感謝される終了劇が行われる。これらは子どもたちの製作の達成感をより高めるための学生の工夫ともいえる。

3. 自らで企画・運営する教育ボランティア活動に取り組んだ学生の調査

3.1. 調査対象

調査対象は、本研究の目的に基づき、教員養成課程に所属し、企画・運営する主体者としてボランティア活動に取り組む学生となる。前節の「わくわくサタデー」、「がやっこ探検隊」の中心的メンバーであり、教職志望である、横浜国立大学教育学部の学生9名に調査を依頼した。

2017年1月に横浜国立大学教育学部7号館の1教室で調査は実施された。なお、調査主旨や回答方法の説明、調査票の配布・回収は筆者が担当した。

3.2. 調査票

調査では、大学生が自己の教師力をどの程度と捉えているのか把握することになる。ここでは質問項目の内容として、横浜国立大学教員養成スタンダード⁴⁾のものを採用した。

横浜国立大学教員養成スタンダードは、当該大学で教職を目指して学ぶ学生が、卒業時まで身に付けておくべき資質・能力を示したもので、学生が省察のツールとして使用する。4カテゴリー計33項目で構成されている（項目の内容は表4を参照）。

「I 教師に求められる基盤的資質」は8項目あり、「1. 社会人としての態度・行動：進んで挨拶し、正しい言葉遣いで話すとともに、服装や身だしなみにも気を配っている」や「2. 教職への熱意：教師になりたいという意欲を持ち、その使命と職務内容、子供に対する責務を理解しようとしている」などの内容である。また、「II 教職に関する知識・理解」は6項目あり、「1. 教育関連法規：教育基本法や学校教育法など、主な教育関連法規の主旨や内容のおおよそについて理解している」、「2. 学習指導要領：学習指導要領の趣旨や目標、内容のおおよそについて理解している」などの内容である。「III 教科等の指導と評価」は8項目で、「1. 学習指導の方向性の理解：主体的・協働的に学ぶことが求められていることなど、これからの授業づくりの方向性について考えている」や「2. 学習指導案の作成：学習指導案を作成する意義や、その具体的な方法について理解し、簡単な学習指導案を作成することができる」などの内容となっている。「IV 児童生徒指導」は11項目あり、「1. 発達の段階の理解：子供たちの発達の段階と、その特徴について理解している」や「2.

表4 教育ボランティア活動に取り組んだ大学生の調査回答の集計

項目	内容	これまでの教育ボランティア活動と関係があると思うのか			これからの教育ボランティア活動と関係があると思うのか			
		5点か4点	3点	2点か1点	5点か4点	3点	2点か1点	
I 教師に求められる基盤的資質	1. 社会人としての態度・行動	進んで挨拶し、正しい言葉遣いで話すとともに、服装や身だしなみにも気を配っている	8	0	1	8	0	1
	2. 教職への熱意	教師になりたいという意欲を持ち、その使命と職務内容、子供に対する責務を理解しようとしている	7	1	1	9	0	0
	3. コミュニケーション	自己を積極的に表現するとともに、他者の言葉を共感的に理解しようとしている	9	0	0	9	0	0
	4. 組織人としての自覚	学校運営は教職員全員で行うということを理解し、他の教職員と連携、協働して職務を遂行することができる	6	2	1	7	1	1
	5. 連携・協力	保護者や地域との連携・協力の重要性を理解している	8	1	0	9	0	0
	6. 省察	常に自分の学びを振り返り、課題を見つけて改善しようとしている。自分自身の行動や子供への指導を振り返り、進んで助言を求めるとともに、それを生かして、さらなる向上をめざしている	7	2	0	9	0	0
	7. コンプライアンス	法令（著作権・個人情報保護など）や規則を遵守することの重要性を理解している。社会や学校等のルールを守り、子供たちの規範となるよう努力している	8	1	0	7	0	2
	8. 健康管理	生活習慣を正しくし、心身の健康維持に努めている	1	1	7	2	1	6
II 教職に関する知識・理解	1. 教育関連法規	教育基本法や学校教育法など、主な教育関連法規の主旨や内容のおおよそについて理解している	0	0	9	1	0	8
	2. 学習指導要領	学習指導要領の趣旨や目標、内容のおおよそについて理解している	0	1	8	1	0	8
	3. 教育課程	各学校において教育課程の編成・実施・評価・改善を行うことの大切さを理解している。具体的な学校の教育課程について理解しようとしている	0	0	9	1	0	8
	4. 教科等の指導	教科等の目標、学習内容の系統性、学年間のつながり等について理解するとともに、効果的な指導法について考えている	0	0	9	2	0	7
	5. 学習評価	学習評価の役割や方法、指導と評価の一体化の重要性について理解している	0	0	9	2	0	7
	6. 現代的な諸課題	社会の変化に対応する課題（グローバル化、情報化、E S D等）や教育改革の動向について関心を深め、考えようとしている。現代的な諸活動に対する諸機関の取組を理解しようとしている	0	0	9	1	0	8
III 教科等の指導と評価	1. 学習指導の方向性の理解	主体的・協働的に学ぶことが求められていることなど、これからの授業づくりの方向性について考えている	2	0	7	4	1	4
	2. 学習指導案の作成	学習指導案を作成する意義や、その具体的な方法について理解し、簡単な学習指導案を作成することができる。子供たちの学習状況や興味関心を考慮した学習指導案を作成し、指導を受けて修正することができる	2	0	7	3	0	6
	3. 教材の準備活用	学習のねらいに応じた教材作成の重要性を理解している。目標の実現に有効と思われる教材・教具を選定し、効果的に活用することができる	3	2	4	7	0	2
	4. ICTの活用	教科指導におけるICT活用・情報教育について理解している。ICT機器を授業等の場で活用することができる	0	0	9	2	0	7
	5. 授業実践	模擬授業を通して、教師としての表現力を高めたり、発問や板書等のスキルを高めたりしている。授業のねらいや子供の反応などに留意しながら授業を行うことができる	1	0	8	5	0	4
	6. 授業観察	他者の授業に対し、よさと課題、改善の方法などを意識しながら、マナーを守って参観することができる	2	0	7	4	0	5
	7. 授業評価	授業評価の意義や方法について理解している。自他の授業について、学力の育成、子供たちへの関わり方等の観点で評価することができる	0	0	9	2	0	7
	8. 授業における学習評価	教科等に応じた評価規程の設定の仕方を理解している。評価規程に基づいて子供の学習の表れを捉え、評価することができる	0	0	9	2	0	7
IV 児童生徒指導	1. 発達段階の理解	子供たちの発達段階と、その特徴について理解している	6	1	2	8	0	1
	2. 子供への接し方	公平で受容的な態度で一人一人の子供に接し、相互理解を深めようとしている	9	0	0	9	0	0
	3. 問題行動への対応	子供たちの問題行動の背景について多面的に捉える必要があることを理解している。問題行動を発見したらすぐに周囲の教師等に連絡・報告・相談し、適切な指導を行うことができる	7	0	2	9	0	0
	4. 教育相談	教育相談の重要性を理解し、理論や技法に関する基礎的な知識を持っている	0	0	9	5	0	4
	5. 特別支援教育	特別支援教育の意義や、子供たちの障害に応じた指導の在り方について理解している。特別な支援を必要とする子供に対し、専門家のアドバイスを受けながら個に応じた指導を行うことができる	4	0	5	8	0	1
	6. 人権尊重教育	いじめ・差別・不登校や体罰など、子供たちの人権にかかわる諸問題への危機意識を高め、校内組織や関係機関と連携して指導することの大切さを理解している	0	0	9	5	0	4
	7. キャリア教育	キャリア教育の意義や、指導方法に関する知識をもっている	0	0	9	2	0	7
	8. 安全教育	校外学習における安全指導の重要性や、アレルギー等を含む日常生活全般における安全確保のために必要な事項を理解している	8	0	1	9	0	0
	9. 学級担任の職務	学級担任の役割や大まかな仕事内容について理解している	0	0	9	3	0	6
	10. 学級経営の理解	学級経営の大切さや、学級経営案作成の意義について理解している。子供たちとの間に信頼関係を築き、学級集団をまとめるよう努力する	1	0	8	4	0	5
	11. 教室環境整備	教室掲示や座席配置の工夫など、子供たちが学びやすく過ごしやすい教室環境を整えることの大切さを理解している	4	0	5	5	0	4

※回答は5件法で、5点は「とてもそう思う」、4点は「ややそう思う」、3点は「どちらともいえない」、2点は「あまりそう思わない」、1点は「まったくそう思わない」となっている。集計における太字の数字は、ほとんど全員（9人もしくは8人）がそれらの回答であったことを示す（N=9）。

子供への接し方：公平で受容的な態度で一人一人の子供に接し、相互理解を深めようとしている」などの内容である。

各質問項目に対して「これまでの教育ボランティア活動と関係があると思うのか」（以下「これまで」）、「これから」の教育ボランティア活動と関係があると思うのか」（以下「これから」）の2つの視点ごとに回答してもらった。回答方式は5件法とし、選択肢は「5点：とてもそう思う」、「4点：ややそう思う」、「3点：どちらともいえない」、「2点：あまりそう思わない」、「1点：まったくそう思わない」とした。

3.3. 集計結果及び考察

選択肢には1～5の点数が付されているが、あくまで回答の便宜上のものであり、平均値等は算出しなかった。この調査では対象者の条件のため少人数となり、回答を点数化しても正規分布に従わないと推定されるからである。集計では、「5点：とてもそう思う」と「4点：ややそう思う」の回答者数を合算して肯定的回答者数とし、「2点：あまりそう思わない」と「1点：まったくそう思わない」の回答者数を合算して否定的回答者数とした。

集計結果を表4に示す。回答者数が9人もしくは8人の箇所は、ほとんど全員がその回答であったと判断して太字で表している（N=9）。

4 カテゴリーでは「I 教師に求められる基盤的資質」が、肯定的評価の多い項目を比較的多く含んでいた。「これまで」に関して4項目、「これから」に関して5項目と、「これまで」と「これから」ともに肯定的評価が多かったといえる。「1. 社会人としての態度・行動」、「3. コミュニケーション」、「5. 連携・協力」などの内容で構成される「I 教師に求められる基盤的資質」のカテゴリーは、教育ボランティア活動との結びつきがあると推測される。特に、「5. 連携・協力」は「保護者や地域との連携・協力の重要性を理解している」との内容であるが、本研究の調査対象者である、企画・運営する主体者としてボランティア活動に取り組む学生の特徴が表れていると考えられる。

「IV 児童生徒指導」でも肯定的評価が多い項目がみられた。「2. 子供への接し方」と「8. 安全教育」で肯定的評価が多く、これらの内容と教育ボランティア活動との結びつきが示唆される。また、肯定的評価が多い項目は、「これまで」に関して2項目、「これから」に関して5項目と、「これまで」よりも「これから」の方が肯定的評価の多い

項目が多かった。「IV 児童生徒指導」のカテゴリーは、一度ボランティア活動を経験した学生が「これから」の課題として気づく内容である一面をもつかもしれない。その意味で、「IV 児童生徒指導」は、「I 教師に求められる基盤的資質」の次段階の位置付けになるだろう。

「II 教職に関する知識・理解」及び「III 教科等の指導と評価」では、肯定的評価が多い項目はなく、否定的評価が多い項目が多かった。これらのカテゴリーの内容は大学授業で取り扱われるものが多く、学生は講義や演習、大学教員が引率する授業見学会等で学習するものと捉えていると考えられる。ただし、「III 教科等の指導と評価」の「3. 教材の準備活用」については否定的評価の回答が多いとはいえないように思われる（「これまで」に関して4人、「これから」に関して2人）。教材準備は、教師が子どもの実態に応じて行うものであるため、大学授業と教育ボランティア活動との連携を図りやすいのではと推察される。

学生が企画・運営するタイプの教育ボランティア活動と、教師力向上の結びつきについては、その活動の内容（前節 2. 横浜国立大学における学生が企画・運営する教育ボランティア活動及びそこでの「ものづくり事例」を参照）を勘案すると、「連携・協力」の意識形成の面に特徴がみられると考えられる。ここでの「連携・協力」とは、保護者や地域、教職員との連携・協力の重要性を意味している。このことは、調査票における「社会人としての態度・行動」（I-1）や「コミュニケーション」（I-3）、「連携・協力」（I-5）への肯定的評価の多さから推察される。

横浜国立大学において「地域の子どもの交流活動」の教育ボランティアを行っている、「わくわくサタデー」では、レクリエーションを行うのみではなく、それらの前後に開会式及び閉会式を設け、学生たちのプロローグ劇・エピローグ劇を実施している。これはレクリエーションの導入の効果があり、児童がより達成感や充実感を得られるための工夫と考えられる。また、「がやっこ探検隊」では、春先に参加者を募集し、その後は入れ替えや補充をせず、同じメンバーの児童たちに年7回の活動を実施している。回を重ねて交流が深まることを想定しており、児童からの信頼感を得るための学生の工夫といえるだろう。

「わくわくサタデー」及び「がやっこ探検隊」の学生が行うこれらの工夫は、保護者や地域、教職員との連携・協力の下で実現されるものである。推察するに、両団体

は10～20年の歴史の中において、学生の企画の達成に向け、子どもたちの実態を把握して適切に接するためには「連携・協力」が不可欠になることを何度も経験し、意識が醸成されたのではないだろうか。学生たちの児童理解の深さは「2.3. 学生の教育ボランティア活動における「ものづくり事例」」における題材設定からも窺われる。教育ボランティア活動を企画・運営することは学生にとって容易ではないが、両団体は大学の部活動・サークル活動の一面をもっており、先輩から後輩へ手法を受け継ぎながら毎年の企画を達成しているのだろう。

4. まとめ

本研究は、企画・運営する主体者としてボランティア活動に取り組む、教員養成課程の学生を対象に、教師力向上について検討するものであった。一事例として横浜国立大学の学生活動を取り上げ、その一活動として「ものづくり」を紹介した。また、質問紙調査を実施した。成果は次のように整理される。

- (1) 横浜国立大学における「地域の子どもの交流活動」を行う教育ボランティア活動で、学生たちが中心となって活動の企画・運営を行う団体として「わくわくサタデー」、「がやっこ探検隊」の2つを取り上げた。両団体の活動を紹介するとともに、具体的な活動内容として「ものづくり事例」を提示し、学生の企画・運営の内容や規模について把握した。
- (2) 上記活動の学生を対象に質問紙調査を実施した。その結果、「I教師に求められる基盤的資質」と、教育ボランティア活動との結び付きが示された。中でも「保護者や地域との連携・協力の重要性を理解している」に対して肯定的評価が多かった点に、企画・運営する主体者としてボランティア活動に取り組む学生の特徴が表れていた。
- (3) また、「IV児童生徒指導」では、「これまで」よりも「これから」の活動との関係で、学生が肯定的評価を行った項目が多かった。「IV児童生徒指導」は、「I教師に求められる基盤的資質」の次段階の位置付けにな

ると示唆された。

これらの成果を受けて今後は、教員養成課程に所属し、企画・運営する主体者として教育ボランティア活動を行う学生に関して、「保護者や地域との連携・協力の重要性に対する理解」における連携・協力が具体的にどのようなものなのか追究し、どのような過程を経てどのように教師力向上に結び付いていくのか枠組みを明らかにすることが求められよう。そのためには調査方法について、自由記述形式での回答や面接法など多様に採用することや、このようなボランティア活動に参加していない学生と比較することが必要になる。また、学生の企画は多種多様であり、ケースごとに教師力向上との結び付き方について検討することも考えられる。これらの課題の究明を通して、学生が自ら企画・運営するボランティア活動を、大学の教員養成カリキュラムにどのように組み入れるのが今後の課題となる。

参考文献

- 1) 中央教育審議会：これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～（答申）（中教審第184号）（2015）http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1365665.htm（2017年6月30日確認）
- 2) 進藤聡彦、勢田二郎、澤登義洋、角田修：大学生の教育ボランティアが教育実践力の育成に及ぼす効果、教育実践学研究（山梨大学教育学部附属教育実践研究指導センター研究紀要）、14、pp.139-151（2009）
- 3) 若尾良徳、緩利誠：教育ボランティア活動が教員養成課程の学生の意識・態度に及ぼす影響 – 初等教育課程と幼稚園課程との比較から、浜松学院大学教職センター紀要、3、pp.95-105（2014）
- 4) 横浜国立大学教育学部：横浜国立大学教員養成スタンダード（2015）<http://www.edu-design.ynu.ac.jp/standard/>（2017年6月30日確認）